

国内研修 報告書

「まち側が移住者を選ぶまちづくり」

○研究テーマ：まち側が移住者を選ぶまちづくり

○研究場所：神奈川県 真鶴町

○研究期間：2月9日～11日

○研究人数：4人

私はこの度、神奈川県真鶴町という港町に二泊三日足を運んだ。真鶴町は、秋学期に受講したローカルイノベーション論で紹介され、今回の研究テーマにもあるように、「まち側が移住者を選ぶまちづくり」という言葉がとても印象的であった。私自身、宮崎県都城市という田舎のまちで生まれ育ってきたこともあり、移住者というのは地方にとって、まちの人口を増やすためには必要不可欠な存在であり、いつでも、何人でも来てもらいたい存在であるという認識があったため、その逆をいくような考え方はとても斬新で興味が湧いたのだ。どうしてそのようなまちづくりをしているのか、この取り組み方でまちが成り立っている理由は何なのかを知りたいと思い、国内研修という制度を利用して、まちの実態を調査してきた。

国内研修一日目は、まちあるきを行い、その名の通り真鶴町を練り歩いた。今回私たちは、ローカルイノベーション論にゲストスピーカーとして来てくださった川口さんが営まれている「泊まれる出版社」こと真鶴出版さんに二泊三日ともお世話になり、まちあるきはその宿泊プランに組み込まれているものだった。

実際にまちあるきを体験してみて、まず印象に残ったのは、スタッフの方の「今日はどのように回りましょうか？」であった。まちあるきと言っても、ただ単に決まったルートをなぞっていくのではなく、その人が求めているものに対応しているようだった。私たちもスタッフの方とどのように回るかをあらかじめ話し合ってからスタートしたまちあるきだったが、行った先に興味のあるお店を見つけたらそこに入ってみたり、夜ご飯をオススメの寿司屋で食べられるように案内してくれたり、参加者のその時々を大切にしているように感じた。

もともとある移住のシナリオにのっとるのではなく、その人が本当に真鶴町に合うのかどうか、移住先に求めているものと合致するのかがどうかを考えさせられるような体験であった。

二日目は、真鶴出版を営まれている川口さんに直接お話を聞くことができ、また残りの時間で住民の方々にインタビューを行った。

川口さんとのお話は、今回の研修の中でも特に貴重な時間となった。少し緊張気味であった私たちに先に話題を振ってくださり、物腰も柔らかくそれでいてとても考え方が斬新で面白く、私たちもお聞きしたいことが次々にあふれ出した。その疑問に全て答えてくださりつつも、私たちも考えをさらけ出せるような環境だったため、より学びを深めることができたと感じている。川口さんがおっしゃっていた言葉の中で、私が特に印象に残ったのは、「ローカルは余白が多い。だからこそ自分が関われる範囲が広く、面白い。」だった。これは私の中に全くなかった考え方で、正直、それを完全に自分の中に落とし込めていないように思っている。だからこそ、この研修期間はもちろん、今後も様々なまちを実際に見て学んで、経験を得ながらじっくり向き合っていきたい。

そして、住民の方々へのインタビューだが、これは実際に自分達もまちを歩きながら、道端やお店で出会った方に話しかけに行き、お話を聞くという方法をとった。まちを歩く中で最初に出会ったのは、約 50 年間真鶴町で暮らしているという女性だった。急に話しかけたのにも関わらず、すごく真剣に私たちの話を聞いてくださり、自分の話をしてくださった。この女性だけではなく、インタビューをさせていただいた方々がとても好意をもって私たちに対応してくださり、二日目だけでも真鶴町に住む皆さんの人柄が穏やかで優しいことが十分に伝わってきた。また、それが真鶴町全体の温かさに繋がっているように感じた。ただ、このインタビューを通して学んだのは、真鶴町の良いところだけではなかった。移住者ではなく、真鶴町で生まれ育ってきた方、またこの町に嫁いでこられた方にお話を聞くことが多く、この町で暮らすことが当たり前であり、真鶴町に対して特別な感情は抱いていないという言葉もあった。一日目のまちあるきや、川口さんとのお話では聞くことのできなかった町の住民の、より深いところの“リアル”を知ることができた。

インタビューを終え、二日目の最後は、ローカルイノベーション論の講義内でも紹介があった、草柳商店へと足を運んだ。ここは、あーちゃんと呼ばれ親しまれている女性が営む、老舗の酒屋であった。夜になると仕事を終えた住民がここに集まり、たちまち賑やかになる。そう笑顔で話すあーちゃんは、まち全体を家族のように愛しているこのようだった。また、草柳商店には、何代目ともなる日記ノートが置いてあった。あーちゃんはもともと日記をつけていたそうで、何年か前にそれをみんなの日記帳にしたらどうかと提案があったそうだ。そのノートには温かい言葉がたくさん詰まっており、もちろん私たちもそのノートに思いを込めさせてもらった。次また来たいと思う、来るのが楽しみになる、そう思えた瞬間だった。

そして最終日だが、予定を変更させ、真鶴町に移住した方々へのインタビューを行った。本来ならば真鶴町立中川一政美術館を訪れる予定だったのだが、川口さんとお話をする中で、もっと住民の方にお話を聞いて回りたいと感じたため、急遽変更させてもらった。

その時間を使ってお話を伺いにいった先は、コミュニティ真鶴という場所であった。ここは、地域の子供たちが集う場所となっていて、放課後の子供たちの居場所の役割を果たして

いた。そこで出会ったのが、八年前に真鶴町に移住してこられた二児の母親であった。彼女は、「選択肢が少ないからこそ自由な気持ちでいられる。暮らしていて本当に必要なものが分かる。」と話してくれた。次々に便利なものばかりが生み出され、どんどん楽を覚えてしまっているような世の中において、その言葉に私ははっとさせられた。自分が暮らしに求めている本当のものは何なのか、そう考えさせられたような気がする。

また、その後に向かったのは、真鶴町に U ターンしてきたご夫婦が営む「青木商店 GLIDE」というカフェだった。もともとは青木商店という先代から受け継がれてきたお茶屋さんだったのだが、ついにお店を畳むこととなり、そこに当時熱海でカフェを営んでいた息子夫婦が戻ってきたそう。まちをより良くしたいという真鶴町で議員をされていた父親の背中を見て育ったという背景が大きく影響していて、その思いが自然と息子さんにも受け継がれているようだった。川口さんもそうだが、このまちのすごいところは、自分の町を本気で愛し、その気持ちを恥ずかしげもなく周囲にさらけ出せる人が多いところだ。本来、それは当たり前のように思えるかも知れないが、実際は全くそうでない環境であると感じている。その裏付けに、私自身が生まれ育ったまちがある。私の住んできた町では、「都城ってどんなところ？」と聞かれると、「え〜、何もないよ。」と答えるのがテンプレート化されてきているように思える。私もそう答えてきた。これは、誰かがそうさせたというより、みんな勝手にそう育てしまったという方が正しい。真鶴町のように、周囲に一人でもまちを本気で愛す大人がいることが重要なカギになるだろうと考えた。

二泊三日の国内研修を通して、私は新たな発見があった。それは、アンテナを張るだけで全く違う見え方になるのではないかということだ。今回、私は真鶴町に興味津々で訪れた。だからこそ、ほんの些細な事でも目につき、疑問や魅力の発見を生み出すことができた。これはただ単に真鶴町が素敵なおとこ過ぎた、という考えもあるが、私はそうじゃないような気がした。自分の地元も同じようにアンテナを張ってまちを歩いてみる。そうするだけで新たな発見が生まれるような気がしている。今後のまちづくりへの関わり方を広げさせてくれるような研修であった。